

3千人超が被害を受けた森永ヒ素ミルク事件で、粉ミルクに含まれていた有毒物質のヒ素を特定した岡山大医学部(岡山市)に、これまで現存が確認されていなかった未開封の粉ミルク缶と、同大病院の第1号患者のカルテが保管されていることが20日、関係者への取材で分かった。戦後最大の食品中毒「と伝える貴重な史料となりそうだ。

(26面に関連記事)

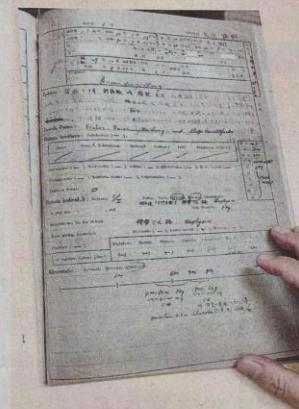
同大医学部は当時、岡山県内外で皮膚が黒ずみ、肝臓が腫れた乳児の患者が相次いだことから原因解明を急ぎ、55年8月に森永乳業(東京)の粉ミルクに混入されたヒ素による中毒と初めて特定。70年には広島県瀬野川町で被害児を追跡調査し、知的発達の遅れといった後遺症を医学的に証明するなど同事件と深い関わりがある。

未開封缶 (高さ11.5cm、直径

## 森永ヒ素ミルク事件(1955年)



岡山大医学部に長年保管されていた森永ヒ素ミルク事件の未開封缶



岡山大病院の第1号患者のカルテの写し。左上に赤字で「森永」の押印と手書きの通し番号が振られている

## 未開封缶、カルテ現存

10枚)は、追跡調査を行った疫学・衛生学分野教室(当時は衛生教室)の金庫に長年保管されていた。側面に「森永ドライミルク」と記され、缶底にはM F 5506」とロット番号が刻されている。ヒ素が混入したとされる。カルテは、同大医学部に残されていた各診療科の数十年分の状である「皮フの色素沈着」

国は事件発覚後、販売店や家中から複数の被害者のものが見

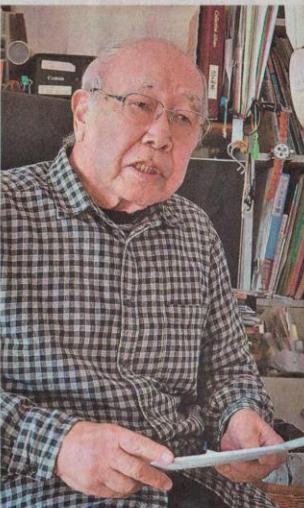
れた。未開封缶 (高さ11.5cm、直径

## 岡山大保管 教訓伝える史料

森永ヒ素ミルク事件の被害者救済団体・ひかり協会(大阪市)の前野直道理事長の話によると、森永ヒ素ミルク事件は確認されていない。同教室は70年近くの歳月を経て未開封缶と当時のカルテが確認されたことに大変驚いている。事件の風化を防ぎ、過ちが二度と起きないよう改めて考え方にしてほしい。

未開封缶と第1号患者のカルテ(写し)は同大医学部内医学資料室で4月以降一般公開される。保管状況や経緯などを調査した同大客員研究員の木下浩・医学資料室長は「後遺症は今も多くの苦しむ被害者は今も多く、決して終わっていない問題。食の安全や企業責任の在り方を考え続けていくための貴重な史料として守り続けたい」と話している。(大橋洋平)

# 鑑定技術進展期待した



岡山大で取り組んだ追跡調査の論文を手に話す太田さん

森永ヒ素ミルク事件の被害者の元にあった未開封の粉ミルク缶が岡山大医学部で確認された。「鑑定技術の進展で有害成分をより詳細に分析できるようになると期待した」。当時、保管を決めた同大医学部衛生学教室(現疫学・衛生学分野教室)の講師だった太田武夫同大名誉教授(84)は狙いをこう話し、今回、同様に保管が明らかになった患者のカルテと共に「被害者救済の一助になれば」と願う。(大橋洋平)=1面関連

事件では、仲介業者を含めた企業の不適切な管理体制、過剰な利益追求のため、最も安全性が求められる乳児用の粉ミルクに粗悪な工業用薬品が混入。太田さんは「薬品は産業廃棄物に近い代物。被害者の症状や後遺症も多様だっただけに、当時の鑑定では検出できないヒ素以外の有毒物質があつても不思議ではないと考えた」と振り返る。

被害者家族から未開封缶の寄贈を受けたのは1970年ごろ。直前の69年に大阪府の保健師らが被害者宅を訪問し後遺症に苦しむ子どもたちの存在を初めて明らかにしたことを受け、同教室が医学的に裏付けるため、広島大と共に広島県瀬野川町で後遺症に関する追跡調査に乗り出した時期と重なる。

## 被害者救済の一助に

岡山大は金庫で保管することを決めたが、「まさか現在まで残されていたとは。歴代の教授たちに感謝したい」と太田さん。ただ、製造から70年近くの年月がたち、内容物の成分は大きく変質している可能性もある。「今となつては開封せず『負の遺産』として後世に残すべきかもしれない」と話す。

太田さんは、わが子に毒を飲ませたと涙を流して悔いる母親たちの姿が脳裏から離れないという。「カルテを含めて医学史に残る貴重な史料。ぜひ被害者、その家族の無念に思いをほせてほしい」

### ズーム

**森永ヒ素ミルク事件** 1955年4~8月に森永乳業徳島工場で製造した粉ミルクに大量のヒ素が混入、飲んだ乳児が高熱や下痢などを起こし、約130人が死亡した。73年11月に業務上過失致死傷罪で工場関係者の有罪が確定。同

12月、被害者団体「森永ミルク中毒のこどもを守る会」(現森永ヒ素ミルク中毒の被害者を守る会)と森永乳業、厚生省(現厚生労働省)の三者が恒久対策案に合意、翌年に救済団体「ひかり協会」が発足した。